

ねずみの嫁入り

楠山正雄

むかし、むかし、ある家のお倉の中に、お米を持もって、麦を持って、粟を持って、豆を持って、たいそうゆたかに暮らしているお金持ちのねずみが住んでおりました。

子供がないので神さまにお願いしますと、やつと女の子が生まれました。その子はずんずん大きくなって、かがやくほど美しくなつて、それはねずみのお国でだれ一人くらべるものない日本一のいい娘になりました。

こうなると、もうねずみの仲間には見わたしたところ、とても娘のお婿さんにするような者はありませんでした。ねずみのおとうさんとおかあさんは、

「うちの娘は日本一の娘なのだから、何でも日本一のお婿さんをもらわなければならない。」と言いました。

そこでこの世の中でだれがいちばんえらいかというと、それは高い高い空の上から世界中あかるく照らしておいでになるお日さまの外にはありませんでした。そこでおとうさんはおかあさんと娘を連れて、天へ上つていきました。そしてお日さまに、

「お日さま、お日さま、あなたは世の中でいちばんえらいお方です。どうぞわたくしの娘をお嫁にもらってくださいまし。」

といって、ていねいにおじぎをしました。するとお日さまはにこにこなさりながら、

「それはありがたいが、世の中にはわたしよりもっとえらいものがあるよ。」とおっしゃいました。

おとうさんはびっくりしました。

「まあ、あなたよりもえらい方があるのですか。それはどなたでございますか。」

「それは雲さ。わたしがいくら空でかんかん照つていようと思つても、雲が出てくるともうだめになるのだからね。」

「なるほど。」

おとうさんはそこで、こんどは雲の所へ出かけました。

「雲さん、雲さん、あなたは世の中でいちばんえらいお方です。どうぞわたくしの娘をお嫁にもらってくださいまし。」

「それはありがたいが、世の中にはわたしよりもっとえらいものがあるよ。」

おとうさんはびっくりしました。

「まあ、あなたよりもえらい方があるのですか。それはどなたでございますか。」

「それは風さ。風に吹きとばされてはわたしもかなわないよ。」

「なるほど。」

おとうさんはそこで、こんどは風の所へ出かけていきました。

「風さん、風さん、あなたは世の中でいちばんえらいお方です。どうぞわたくしの娘をお嫁にもらってくださいまし。」

「それはありがたいが、世の中にはわたしよりもっとえらいものがあるよ。」

おとうさんはびっくりしました。

「まあ、あなたよりもえらい方があるのですか。それはどなたでございますか。」

「それは、壁さ。壁ばかりはわたしの力でもとても、吹きとばすことはできないからね。」
「なるほど。」

おとうさんはそこでまた、のこの壁の所へ出かけていきました。

「壁さん、壁さん、あなたは世の中でいちばんえらいお方です。どうぞうちの娘をお嫁にもらってくださいまし。」

「それはありがたいが、世の中にはわたしよりもっとえらいものがあるよ。」

おとうさんはびっくりしました。

「まあ、あなたよりもえらい方があるのですか。それはどなたでございますか。」

「それはだれでもない、そういうねずみさんさ。わたしがいくらまっ四角な顔をして、固くなって、がんばっていても、ねずみさんはへいきでわたしの体を食い破って、穴をあけて通り抜けていくじゃないか。だからわたしはどうしてもねずみさんにはかなわないよ。」
「なるほど。」

とねずみのおとうさんは、こんどこそほんとうにしんから感心したように、ぼんと手を打って、

「これは今まで気がつかなかった。じゃあわたしどもが世の中でいちばんえらいのですね。ありがたい。ありがたい。」

とにこにこしながら、いばって帰っていきました。そして帰るとさっそく、お隣のちゅう助ねずみを娘のお婿さんにしました。

若いお婿さんとお嫁さんは、仲よく暮らして、おとうさんとおかあさんをだいじにしました。そしてたくさん子供を生んで、お倉のねずみの一家はますます栄えました。

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年5月10日第1刷発行

1992（平成4）年4月20日第14刷発行